

「福音に固く立って」(一コリント一五章一〜一一節)

1 思い起こせ!

信仰生活あるいは教会生活、それは私どもの人生がそうであるように決して平坦なものではありません。山あり谷あり、しかも登っていると思っていたら下っているような、またその逆であったり、悲しみもあり喜びもあり、忍耐を強いられる時があり希望に満ちあふれる時もあります。しかしどのような場合でも神が共にいます、インマヌエル、それが信仰の生活、教会の生活です。

平坦でないということは私どもの信仰がつねに脅かされているということです。むしろそれは私どものよりどころとしている真理そのものが脅かされているというのではありません。そうではなくてその真理との関係に立つ、その真理との関わりの中で生活している私ども人間が脅かされ、信仰があやふやなものとなるということです。

平坦でない信仰生活の中で、コリントの教会の人々も、その信仰が危うくされ、あやふやなものとなっていると、パウロはこの手紙をしたためたとき見ていたようです。というのも彼は今日の箇所を「兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます」と書き始めているからです。「もう一度知らせます」というのは言葉を換えて言えば「思い起こしてもらいたい」ということです。「福音」を、すなわち「わたしがあなたがたに告げ知らせた福音」を「思い起こしてもらいたい」。そのようにパウロは語りはじめます。

そのように問いかける資格がパウロにはありました。資格というより、義務、あるいは責任と言ったらよいでしょうか。コリントの信徒に福音を伝えたのはパウロであったからです。彼らのあいだでそれがどのような経過をたどり、どのような実りを結んでいるのかパウロは責任を痛感していたといつてよいと思います。それが「もう一度知らせたい」「思い起こしてもらいたい」という言葉の意味です。

パウロは確かに問いかけています。しかしこの問いかけには、じつはコリントの信徒たちが自らに問うようにということを含む問いかけでもありました。なぜかと言えば、コリントの人びとは、福音を、「受け入れ、その上に立ち、それによって救われている」からです。福音を自ら受容し、それをよりどころとして生活し、それによって救いにあずかっているとするれば、その福音との関係をもう一度、もう一度といわず、繰り返し問い直すことが求められて当然です。私どもの側に何かしらの善さがあつて神様から認められたのではないということ、人よりも愛に富んでいて親切だから神様の救いにあずかったのではないということ、つまり私どもの側に救われる何の理由も何の根拠もないということ、ただ

イエス・キリストによって、ただ福音によって、神様の然りが私どもを生かしているという事、そのことに私どもの側でもアーメンと言って感謝の応答を捧げていくということ、そうした福音との関係を私ども自身が問い直すこと、それがここでのパウロの問いかけには含まれているのです。

2 福音とは

さて問題は福音です。パウロは福音をここでどのようにとらえて、私どもに伝えているのでしょうか（三〜六節）。

最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。

ケファというのはペトロのことです。さてここを読んでとても興味深いのは、聖書の時代の教会では、信仰の要点が、こうやって簡潔にまとめられて伝えられていたということです。そしてこれらがやがて、「われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず」から始まる使徒信条などとして形をなしていくことになるわけです。

ここにはイエス・キリストの、その死と復活に関することがまとめられています。罪のために死んだこと、葬られたこと、甦られたこと、そして現れたことです。使徒信条と比べてみると、使徒信条では「葬られ」のあとに「陰府に下り」があります。しかし使徒信条には、今日の箇所にある「現れた」というのがありません。復活のあとイエスが四十日にわたりその復活の体をもって自らを「現された」ということです。イエス・キリストの顕現という言葉を使う場合もあります。そうすると、死、葬り、甦り、そして甦った方の現れ、ないし顕現、この四つのがキリストについて語られていることになります。そして今日の箇所全体を見ると、この最後の「顕現」、「現れた」ということが、パウロ自身の現在の生き方にも関係するものとも重要なこととして言及されていることが分かります。福音書には、たとえばルカによる福音書に、エマオ途上での二人の弟子たちへの顕現が、またヨハネによる福音書には、ガリラヤ湖のほとりでイエスの死後漁師にもどつて漁をしていたペトロたちにイエスが現れた物語などよく知られています。キリスト教信仰にとって復活顕現の重要性を語っているのは書簡ではここが一番です。

甦った方の現れに接したときのことを少し想像してみましょう。ペトロにしてもヤコブ

にしてもそれは本当にびっくりしただろうと思います。私ども日本人なら幽霊にびっくりします（いかんせん散文的な私は幽霊に遭遇したことはありませんが）。しかしこの場合決して幽霊ではありません。本当に生きているイエス・キリストです。イエス・キリストなら死んだはずです。死んだイエスが生きている。復活者の現れに接したときの弟子たちの様子をよく調べてみると、じつは本当に驚いているのは、甦った方が死んだ方と同じイエスだと気づいたときです。エマオではイエスが最後の晩餐でなされた同じパン裂きをなさった時ですし、ヨハネでは、かつてイエスが語られたと同じように、ペトロらに漁をお命じなさり、かつてと同じように魚が大量にとれた時です。同じ方であることに気づいたとき驚愕しています。

こういうふうにかえたらどうでしょうか。私どもは、ふつう、死んだ人は死んだ人であって、生きている人は生きている人だ、そしてそれぞれが本当のことだ、それゆえにそれぞれ絶対的なことだと考えます。しかしどうでしょうか。もし死んだ人が生きている、生きている人は死んだ人だ、この両方のことが一つとなっていたら。それは私どもが本当のこと・絶対的なことだと考えていることが、本当のことではない、絶対的なことではないと、明らかに変わったということではないでしょうか。そこに人間を超えた現実があるということ、神の恵みの自由な働きがあるということではないでしょうか。この自由を知れば、私どもまた私どもを縛っているものから自由にされるということではないでしょうか。死は、ですからそのまま命の始まりです。うまくいかなくて絶望しても、それはそのまま希望のはじまりです。罪を犯してだれからも後ろ指をさされるとしても、すでにそれ自身が神の赦しと救いのはじまりです。十字架の死は人間による神の否定です、復活は神による人間の肯定です。私どもがどのようであっても、その私どもに、神の然りが、語られていることです。

3 固く立つ

パウロはこの復活のキリストが私にも現れたと語っています。使徒言行録などに伝えられている彼の回心のことを思い浮かべてよいでしょう。

彼がここで復活のキリストが最初に、ペトロに、その後十二人に（弟子たちのことと考えてよい）さらに五百人以上の人に現れ、ヤコブに、そして最後に「月足らずで生まれたようなたしにも現れました」と書いています。ここでたくさんの人を上げているのは歴史的な事実を訴えて、キリストの復活を確かなものとして示そうというのではないことは明らかです。

そうではなくてキリスト教会を迫害してきた自分がキリストの復活とその現れによって変えられた、まったく別な人生を歩むように変えられたと言っているのです。しかもこ

の別な人生は神様がはじめから彼のために用意して下さっていたものでした。それが本来の自分の人生でした。それゆえただ神の恵みによって今日のわたしがあると言っているのです。

今日は「福音に固く立って」という説教題をつけました。福音に固く立って、そこにしっかりと立って歩むことをパウロは今日の箇所でのコリントの信徒へ呼びかけているように思ったからです。そしてそれはそのまま私どもに対する呼びかけだと感じたからです。間違つてはならないのは、「福音」に固く立つということです。自分の信念や、決心や、能力や、夢や希望や、その他のようなものであれ、個人的で偶然的気分や意見に立つというのではないのです。「立つ」という言葉を今私は使っていますが、今日の箇所で「生活のよりどころとしている」と訳されている言葉です。もともとは「立つ」「立っている」という言葉です。パウロはこれをよく使いました。彼の実感のこもった言葉の一つです。もっとも代表的な箇所はローマ書五章二節です。皆さんも思い起こされるかも知れませんが、「いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ」という言葉があります。「立つ」あるいは「立っている」という言葉で歴史上有名なのはマルティン・ルターです。昨年はルターの宗教改革五〇〇年でしたが、彼がプロテスタントの信仰を捨てるように、撤回するように、当時のローマ教会から迫られたとき、「われここに立つ、それ以外のことはできない」という言葉を吐いて、敢然として宗教改革の道を歩みはじめたことはよく知られていることです。「ここに」「ここ」とは、神の言葉であり、信仰であり、一言で福音にほかなりません。

だれもがこういう経験をしたことがあるのではないでしょうか。砂浜に裸足で立って海の水が足をぬらし、引き波によって、自分の足下がぐらつくという経験です。足の下の砂がとられていくのは楽しい経験です。それはそれで気持ちのよい、いやなことは忘れていくような経験です。どんなに足に力を入れて立っていても持つて行かれます。「立つ」として大切なのは動かないものに立つということです。動かない岩、そこに立たなければなりません。それは何か、それは福音です。イエス・キリストによって、その十字架の死と復活とによって私どもの罪が赦されたこと、神との関係に生きることが許されたこと、つまり神の然りです。神の然りという土台の上に固く固く立って新しい年度を共に歩んで参りましょう。

(二〇一八年四月一日)